

Ⅱ 実践の展開

男女共同参画時代の課題解決型学習

広岡 守穂

1 21世紀の社会に生涯学習は不可欠である

この稿では課題解決型の学習プログラムに必要なものはなにかについて、わたし自身の経験を踏まえて述べる。しかしその前に、生涯学習の役割について、わたしの考えを簡潔にまとめておきたい。

21世紀の社会にとって生涯学習は不可欠の重要な制度である。21世紀の社会は、ひとりひとりの市民に自由な自己実現のための機会を平等に提供することをめざさなければならない。だれもが、人生のどのステージからでも、自由な自己実現に挑戦することができる。そのような社会である。自由な自己実現のための平等な機会を提供すること、それは21世紀のデモクラシーの理念である。

そのために生涯学習は非常に重要な役割を求められている。人びとの自己実現への挑戦をささえるために生涯学習は重要な役割を期待されている。そしてその役割を担うために、生涯学習は変わらなければならない。

どうして生涯学習が重要なのか。それを理解するには、人が自己実現の道をたどるとき様子を具体的に思い浮かべてみればよい。そのキーワードはケイパビリティ、エンパワーメント、ソーシャル・キャピタル、そしてアンドラゴジーの4つである。

ケイパビリティとエンパワーメント

人にはいろいろな能力がある。アマルティア・センの用語を借りて「ケイパビリティ（潜在能力）」と呼ぶことにしよう。絵を描くのが上手だとか、運動能力が高いとか、ネットワークをつくるのが上手だとか、正義感が強いとか、人間の能力（ケイパビリティ）というべきものは多様である。その能力のいくつかを選び、開発し、組み合わせて、人は生きている。わけても仕事をするとき、自分のケイパビリティを十分に開発し、みがき上げることが要求される。

ケイパビリティを開発する主要な手段はもちろん学校教育である。若い人びとは学校で、将来の職業につくために必要な知識や技術を身につける。医者になるために大学で学ぶとか、画家になるために美術学校で学ぶといったことを思い浮かべてみれば、そのことはよくわかるだろう。しかし学びが必要とされる場面はそれだけではない。21世紀のように変化の激しい社会では、いったん退職した人や子育て介護などで深刻な経験をした人が、再就職したり、起業したり、NPOなど社会活動をはじめたりするために、しばしば学びが必要であり効果的である。そのための学びの場を提供するのが生涯学習である。

自己実現に必要な能力を開発することをエンパワーメント（力をつけること）という。学習はエンパワーメントを構成するかなめの要素のひとつである。人びとは学びから活動や事業や就業へ一歩踏み出す。だからそれをささえるタイプの学びを開発しなければならない。また人生のどのステージからでも自己実現のためにエンパワーメントする学習機会が開かれていなければならない。

学びとソーシャル・キャピタル

しかし自己実現のための学びに求められるのは知識や技術を獲得することだけではない。エンパワーメントには、業界の商習慣を知るとか、人脈をつくるといったこともふくまれる。そういうことも仕事や活動をおこしたり就

II 実践の展開

業したりするときに必要であり、その人の能力に属することだからである。中高年になってから、新しい仕事をおこしたり新しい社会活動をはじめたりすることを考えると、人脈をこしらえたり業界のしきたりを知ったりするほうが、大学や専門学校で学ぶより、よほど適切かつ有効である場合が少なくないだろう。エンパワーメントにはネットワークを広げること、つまりソーシャル・キャピタルを蓄積することが含まれるのである。

学びは出会いである。学びの場では、ふつうに生活していたら決して出会うことがないであろう人と知り合う。学びの場は、新しいネットワークをつくる、つまりソーシャル・キャピタル（社会関係資本）を形成するのにうってつけの場である。ネットワークがなぜ社会関係「資本」なのかといえば、お金や技術とともに、ネットワークを持っていることは事業をおこす上で、不可欠の条件だからである。

学びはソーシャル・キャピタル弱者に対して、その形成をうながす効果的な手段である。夫の転勤にしたがって大規模団地に転居した妻が地域の女性センターの講座で学ぶとか、小さな子どもを育てている母親が公民館の託児つきの講座で学ぶといったとき、彼女の人生を左右するのは、何を学ぶかではなくてだれと知り合うかなのである。

出会いから人生の新しいステップがうまれる。いっしょに学んだ仲間とともに活動に踏み出す。これまでも社会教育の分野では、自主学習グループをつくるとか、市民講師の登録をするとか、講座の企画立案や運営にボランティアとして関わるといったことがおこなわれてきた。

これからはさらにそれを一歩すすめることが重要である。いっしょに学んだことをきっかけにして自主グループができたときに、そのグループに次のステップに関する適切な機会や情報を提供することが必要である。これからの生涯学習にかかわる人たちは、その意味で、インキュベーターの役割を求められるのである。

アンドラゴジー（大人の学び）とエンパワーメント

マルコム・ノールズは、効果的な大人の学習は知識教養を高めるタイプのものではないといい、子どもの学びをペダゴジーと呼んでいる。知識教養を高めるタイプの学習は子どもにとっては効果的であるが、大人には効果が小さい。一方、大人が効果的に学ぶのは日常生活の課題を解決する必要に迫られたときである。そう述べて、ノールズは大人の学びをアンドラゴジーと呼んでいる。課題解決型の学習はアンドラゴジーなのである。

課題解決型の学習はケイパビリティの開発とソーシャル・キャピタル形成をささえる。それを足がかりにして学習者は学びから活動へ一歩踏み出すのである。繰り返しになるが、知識や教養の獲得をささえることが重要なのではない。

ケイパビリティの開発というと抽象的だが、具体的には自信をつけることだと言っている。学習者が自分に自信をもつようになるには、うけたまわり学習ではあまり大きな効果は望めない。成果物をもとめるタイプの学習が効果的である。報告書をつくるとか、シンポジウムを開くとか、なんらかの課題をなしとげることが、自分に自信をもつ大きなきっかけになるからである。

2 男女共同参画社会をつくる－課題解決型学習の事例から－

グループ「本気（まじ）」とNPO法人エンツリー

学びから活動に踏み出した二つのグループを取り上げて、そのプロフィールを紹介しながら、課題解決型学習のあり方を考えてみたい。

ひとつはグループ「本気（まじ）」である。グループ「本気（まじ）」は、やまなし女性未来塾でいっしょに学んだ女性6人が中心になってつくったグループである。既婚女性の意識調査から出発して、南アルプス市の区長・副区長の研修プログラムを企画実施するなど、男女共同参画をすすめるための活動をしてきた。現在はグループとして活動する場面は少なくなっていて、メンバーが年に数回顔合わせをするくらいになっているが、それぞれ自分の

II 実践の展開

活動をもっている。なにかあればいつでもグループで活動するだろう。

もうひとつはNPO法人エンツリーである。こちらは(社)学術文化産業ネットワーク多摩(以下ネットワーク多摩と略す)が実施した講座の受講者がつくった団体である。学習プログラムの企画運営から出発して、地域情報のガイドブックなどをつくる活動をしたあと、八王子市が設置するつどいの広場の管理運営を手がけるようになった。現在では私鉄の駅前にある商業ビルコミュニティスペースの管理運営もおこなっている。

両方とも男女共同参画センターのエンパワーメント型学習から生まれたグループで、学びにとどまらず、そこから一歩踏み出して活動をはじめた点が共通している。そして両方とも、男女共同参画の実現という目標を踏まえている。かかげる課題はたいへん大きい。グループ「本気(まじ)」もNPO法人エンツリーも、男女共同参画をすすめるという大きな目的を持ったグループである。ただし、その手段は、主張を述べて人びとの共感をえようという方法ではない。意見を主張して人びとの理解を広げる活動のことをアドボカシーというが、グループ「本気(まじ)」もNPO法人エンツリーも、アドボカシーより、もっと具体的日常的な事業活動に軸足を置いている。

そのほかに重要と思われる共通点をあげると、活動に踏み出すときに県庁や市役所などの情報を上手に活用したこと、もっと言うと県庁や市役所との連携があったこと、そして学習成果がその後の活動に役立ったこと、などがある。

両者が違うところは、経済的な面である。NPO法人エンツリーは事業として経営的に成り立つ活動をめざしている。生涯学習から立ち上がった自主グループは経済的なことは度外視して活動することが多いのだが、エンツリーは「下請け的」「ボランティア的」な立場にとどまらず事業として活動を発展させることをめざしている。

学習から活動へ グループ「本気(まじ)」のばあい

グループ「本気(まじ)」のメンバーは、2005年に、やまなし女性未来塾

ではじめて知り合った。このときメンバーが共通に関心を持っていたのは、家族や夫婦を通じて見えるジェンダーということだった。平等な男女の関係という視点から、家族や夫婦はこうあるべきだという理想について、メンバーの考えはほとんど一致していたし、年齢も似通っていて、よく似た経験もあった。

メンバーは40代50代の既婚女性100人に聞き取り調査をおこなった。対面で話を聞くことで、女性の本音に迫ろうとしたのである。聞き取りは6人で手分けして1人16～17人に対して実施した。たいへんな作業だったが、身につまされることも多くて、中身の濃い聞き取りになった。

調査は『聞きちゃった!～100人に聞きました 40代・50代の妻たちの本音～』という報告書にまとめられた。この報告書は地元紙に大きく取り上げられたことで評判になった。

これがきっかけになって国立女性教育会館(ヌエック=NWEC)のフォーラムに参加してワークショップを開いたり、市役所の職員研修プログラムをつくったり、地域フォーラムに招かれたり、男性の意識調査をおこなったり、意識啓発のためのパネルシアターをつくったり、と活動の場がどんどん広がっていった。ちなみにグループの名前をグループ「本気(まじ)」としたのはヌエックのフォーラムに参加したときからだった。

いままで見てきたことからうかがわれるように、グループ「本気(まじ)」の活動が起こるきっかけになったのは『聞きちゃった!～100人に聞きました 40代・50代の妻たちの本音～』が評判になったことだった。マスコミが注目しそうなテーマでありアプローチである。自分たちで調査を設計し、自分たちで聞き取りをした。しっかりした学習の成果物をつくった。それが次のステップを踏む足がかりになったのである。

グループ「本気(まじ)」のメンバーはやまなし女性未来塾で家族や夫婦について学んだ。もしその学びが、講義を聴いたり本を読んだりするうけたまわり学習だったら、彼女たちが活動へ一歩踏み出すにはまだ乗り越えなければならないハードルがあっただろう。

学習から事業へ NPO法人エンツリーのばあい

NPO法人エンツリーのばあいは、事業収入を得て経済的基盤を確立することを重要な目標にしている。

エンツリーの12人のメンバーの中にはスキルや資格を持つメンバーが何人もいる。キャリアカウンセラー、キャリアアドバイザー、産業アドバイザー、ファイナンシャルプランナー、在宅福祉コーディネーター、レクリエーションインストラクター、カラーコーディネーター、保育士、ニットデザイナー、生涯学習コーディネーターなどである。メンバーの多くはフルタイムの仕事についていないが、資格を取ったりかつて就業していた経験がある。そのスキルや資格を事業活動の中でできるだけ生かそうとしている。

エンツリーは、2005年に、ネットワーク多摩の講座をいっしょに受講した女性がつくった。それを受けて、ネットワーク多摩は2007年度の講座の企画運営をこのメンバーに依頼した。このときネットワーク多摩は、エンツリーとの関係について、たんなる下請けとしない、対等なパートナーとする、きちんとした仕事の対価を支払う、ということにした。

エンツリーは、子育て中の女性を対象にした連続講座など、いくつかの講座の企画運営を担当した。そのとき、ただ学習プログラムを企画運営するだけではなく、メンバーから講師を出したり、司会やファシリテーターを出したりした。そういう機会を経験すれば、じょじょに力がついていくからである。講座が評判になれば、講師の依頼が舞い込んでくるようになるだろう。企画運営だけだと、次の展望が開けないしなかなか収入をふやせない。

ネットワーク多摩も、エンパワーメントのためには場数を踏むことがなによりという考えでバックアップした。ネットワーク多摩では学習から事業へ、一步踏み出す人をどう支援するかということが課題になっていた。学んで力をつけ、意欲があっても、実際に事業をはじめするにはハードルがあるからである。実績を積むために業務を委託するのがいいのではないか。そういう考えでサポートした。

さらにエンツリーは八王子市の市民企画事業に応募して市民活動相談コー

ナーを開設したり、市民活動ハンドブックを編集したりした。また羽村市の講座の企画運営も担当した。こうしてエンツリーは自治体の事業にかかわるようになった。こういう実績が評価されて、2008年には、八王子市の親子つどいの広場の運営を受託した。この事業の受託をひかえて、それまで任意団体だったエンツリーはNPO法人の法人格を取得した。

つどいの広場は子どもをつれた親がやってくる場所であるから、その管理運営を受託するのは生涯学習で学んだこととは直接の関係はない。しかし生涯学習でいっしょに学んだ仲間がいなければグループ活動はなかっただろうし、グループの活動がなければ仕事を受託することもなかっただろう。

学びの先に何があるか

エンパワーメント型学習は課題解決型学習である。その先には目的として活動があり事業がある。これが知識教養型学習との大きな違いである。

とはいえ学びの先に何があるかをみると、学びの先の出口がエンパワーメント型学習と知識教養型とで画然と分かれたるというわけではない。課題解決型学習はその「課題」が大きな社会問題に近づけば近づくほど、知識教養型学習に似てくる。活動や事業はエンパワーメント型学習にとって目的であるが、知識教養型学習にとって副次的な、または偶然の産物だということが違うだけである。

知識教養型学習の場合は、人生の純然たる楽しみで学んでいる人が少ない。そういう人たちにとっては学びの先に活動や事業がなければならないということはない。講座の受講者が講座終了後も自主グループをつくって学習をつづけることがよくある。学びの経験を生かして生涯学習センターの講座の企画立案にかかわるといふこともある。グループの人たちが、それは学びの延長で自分たちの楽しみなのだからと考えて、無償で引き受けているケースも多いだろう。それはそれでひとつの出口である。

学習者は自分が受講する講座が知識教養型か課題解決型かを最初から区別しているわけではない。だから講座が課題解決型かどうかは受講者の学ぶ

II 実践の展開

姿勢によって左右されるともいえる。講座のあと、地域や社会に貢献したいと活動をはじめの人たちもいる。なかにはボランティアやNPOの団体をつくる人たちもいる。この場合もやはり無償の場合が少なくないだろう。有償でもそれで生活がなりたつほどの収入にはならない。これもひとつの出口である。グループ「本気（まじ）」はこのケースである。多くないが学びの延長で事業をはじめのケースもある。NPO法人エンツリーはこのケースである。やまなし女性未来塾もネットワーク多摩も、女性人材の育成をめざしていたから、その講座は成果物を求める学習プログラムだった。

以上のことはエンパワーメント型学習と知識教養型学習のちがいを曖昧にするものではない。エンパワーメント型学習はまだ歴史が浅く、ノウハウが蓄積していない。それゆえ十分に成果を上げているとも言い難い。そもそもモデル的な学習プログラムがあるともいえない状態なのである。

とはいえ、学びの先にどのようなステップを準備するかということが、課題解決型の学習にとっては非常に重要なことがらである。国立女性教育会館（ヌエック=NWEC）のフォーラムに参加してワークショップを開くとか、ネットワーク多摩の講座の企画運営を受託するとか、そういった機会を提供するというのが、学習プログラム全体の中に組み込まれていなければならないのである。

3 課題解決型学習に必要な要素

学びから得られるものは何か

グループ「本気（まじ）」代表の有泉妙子さんは、活動をはじめたいきさつについて、次のようにふり返っている。

未来塾を修了し、それぞれの活動に戻っていたメンバーにとって、『聞いちゃった!』は充実感のともなう思い出になるはずでした。ところが、この冊子を読んだ方々から「おもしろい」「いろいろな気づきが詰め込まれている」「このまま終わったらもったいない」と意見が寄せられ、声

がかかり、県の広報番組の中で取り上げられ、新聞の取材も受けるようになりました。こうしてふたたび活動を再開したメンバーは平成18年夏の国立女性教育会館における『男女共同参画のための研究と交流推進フォーラム』に参加し、ワークショップを開こうということになりました……。

この言葉が語っているように、有泉さんたちは最初から何か行動をおこしたいと考えていたわけではなかった。学びから活動へ移るためには、なんらかの要素が必要である。

学びは自己実現をめざすのに必要ないくつもの資源（リソース）を与えてくれる。それは知識にかぎらない。いや、知識はむしろ二次的なものである。5回や6回の連続講座で得られる知識など、たいしたものではないだろう。情報、いっしょに行動する仲間、コミュニケーション能力、自信、ネットワークなどなど、学びから得られる資源は多様である。

グループ「本気（まじ）」がやまなし女性未来塾での学習から得たものは、なんといっても自信だったろうと思う。100人もの女性に聞き取りをして、その結果を報告書にまとめたという達成感、そして報告書が高く評価されたというよろこび、それらが大きな自信になったと思われる。

学ぶことで仲間も得た。いっしょに学んだ仲間は、行動をおこすときに励ましてくれたりいっしょに行動してくれたりする。また情報も得た。やまなし女性未来塾の県庁の担当者は、グループ「本気（まじ）」に対していろいろな情報を提供してくれた。そしてさまざまな出会いから、いつの間にか大切なネットワークができた。

いまあげた「仲間」以下のさまざまな要素を、ひとことでソーシャル・キャピタルと呼ぶ。学びはソーシャル・キャピタルの形成をうながしたわけである。

学習の成果物

学びから一歩踏み出すという観点からみると、学びから得られるものは

II 実践の展開

さまざまである。一步踏み出す力を獲得する。課題解決型学習はエンパワメントに必要なさまざまなものを獲得する機会を提供しているわけである。

もう一度まとめておこう。個人の自己実現をささえるのは、知識、情報、いっしょに行動する仲間、コミュニケーション能力、自信、ネットワークといった要素である。では生涯学習がそういう要素を提供するには、どのような学習プログラムが必要か。

ひとつは成果物である。成果物を仕上げるプロセスで、学習者は知識や技能を獲得する。そして仕上げたときには達成感がある。もちろん成果物は報告書をつくることにかぎらない。シンポジウムを開いてもいいし、自主講座を開いてもいい。コンテストのようなイベントを実施してもいい。芝居をつくったり、DVDを編集したりしてもいい。アイデアはいくらでもあるだろう。

グループ「本気（まじ）」のメンバーは『聞いちゃった!』をまとめたことで大きな達成感を得た。有泉さんのことばを聞くと、その達成感だけで十分だったようにも思える。

『聞いちゃった!』のような報告書をまとめれば大きな自信がつくだろう。しかし成果物が与えてくれるのは自信だけではない。

成果物はエンパワメントに必要ないろいろな要素の源泉になる。成果物を人に示せば、それは恰好の名刺がわりになるだろう。もし成果物がマスコミで紹介されたら、もっと信頼がつくだろう。成果物をつくる過程で、いろいろな人に出会うだろう。ネットワークができる。

成果物をつくる学習は座学とはちがう。うけたまわり学習とは比較にならない時間と労力がかかる。しかし、それだけに獲得するものも大きい。エンパワメントのための講座では学習者に成果物を求めることが有効である。

社会的な評価

有泉さんが語っているように、グループ「本気（まじ）」の女性たちを行動にむけて後押ししたのは、その成果物が高く評価されたことだった。つま

り成果物に対する社会的な評価が重要な要素になっている。具体的には、県の広報番組で取り上げられたり地元紙に大きく紹介されたりしたことである。

実はその背景には、彼女たちの成果物を広く知ってもらおうという県庁担当課のバックアップがあった。講座を主催する側に、学習成果を広く認知されるようにし、そのために成果物をどのようなかたちで見せればいいのか工夫するという姿勢があったわけである。

「100人に聞きました」というのはよいアイデアだった。おなじ夫婦をテーマとするのでも、もしも専門家がおこなうようなアンケート調査だったら、おそらく注目度は高くなかったろう。専門家の研究にはとても太刀打ちできないからである。

テーマをどのような手法でかたちにするか。成果物をどう見せるか。講座を運営する側はそのことを念頭に置いておかなければならない。それには、マスコミに記者発表する、市民や関係者に広報する、自治体の首長や職員に対してプレゼンテーションするなど、いろいろな発表形式がある。

新聞記事になれば、受講者はそれを切り取ってコピーし名刺がわりに活用できる。関係者や自治体職員に知ってもらえば、後々、どんな機会がめぐってこないともかぎらない。みえざる営業活動になっているわけである。そういうみえざる営業活動の手だてをお膳立てしようとする姿勢が、講座を主催する側には求められる。

講座が提供するもの

NPO法人エンツリーは今でこそ事業活動によるしっかりした経営をめざしているが、当初はそういうふうではなかった。そもそも最初は、おなじ講座に参加していてもみんなよそよそしく、講座が終わるとそそくさと家路を急いで帰っていった。2、3回目の講座が終わったあと、いまエンツリーの副代表をしてる広木佑実さんが講座の担当者から受講者の連絡網をつくってほしいと頼まれ、また講座のあとにみんなでお茶でも飲んで親しくなった

II 実践の展開

らどうかとアドバイスされた。そんなことからできたグループだった。講座修了後も、何かするあてがあったわけではなかった。でも月に2回くらい定期的にあつまっていた。

広木佑実さんは専業主婦だった。講座を受講したのは、漠然と何かしたいという気持ちからだった。資格を持っていたが、わたしの資格なんかで世の中に通用するのかしらと思っていた。ふり返ってみると、そのころは自分に対する評価が低かったのだった。

いま代表をしている吉田恭子さんは、そのころネットショップを立ち上げたばかりだった。吉田さんは講座に参加すれば何か出会いがあるのではないかと期待していた。

ほかの仲間とはいうと、主婦をしながら自治体の広報誌の編集にかかわっている人、やはり主婦でずっと女性問題に取り組んできた人、双子を育てながらキャリアカウンセラーの資格に挑戦している人、ケアマネージャーとして働いている人など、活動歴はさまざまだった。講座歴もいろいろだった。共通していたのは、何かしたいけれどどうすればいいのかわからない、との思いをもっていることだった。

吉田さんは講座で学んだ中身よりも講座で出会った人のほうが、もしかしたら大きな収穫だったのではないかと考えている。講座が提供したのは出会いの場だった。

エンツリーの仲間たちの最初の活動は公開で自主学習講座を開催したことだった。せっかく集まっているのだから、せめて学習会を開いてみんなで学ぼうと思った。女性センターの講座企画公募に応募して落選したこともあった。そのころはまだ本格的な事業を行うつもりはなかった。

講座を受講し、仲間ができた、何かしたいと思うけれど、何をすればいいか、何ができるか、最初はよくわからなかった。このあたりのところはグループ「本気（まじ）」もエンツリーも、よく似ている。グループはできた。しかし具体的な活動はまだ見えないという状態である。

講座が終了したとき、受講者の多くはこういう状態にある。そういう人

びとに対して自主グループをつくるようにうながし、さらに自主グループができたら今後の活動について機会や情報を提供する。課題解決型学習の主催者は、そこまでを視野に入れることが必要である。

ロールモデルとキーパーソン

女性センターではエンパワーメントのための講座が開かれている。そこでよく言われるのが、ロールモデルになるような人を講師に迎えると良いということである。受講者とよく似た環境から活動や事業をはじめた人の話を直接本人から聞けば、「あの人ができたんだから、わたしにも」と受講者は元気になる。たしかに効果が見込める。ロールモデルに接することは、ソーシャル・キャピタルをふやすことだといっていいたいだろう。

ロールモデルになるのは講師だけではない。実は受講者の間にロールモデルは隠れている。講座を聴きに来る人はいろいろなキャリアやバックグラウンドを持っている。グループ「本気（まじ）」には、長く子ども劇場の活動や地域の活動を続けてきて、いまは市議会議員になった女性がいる。グループ「本気（まじ）」のメンバーではないが、やまなし女性未来塾で学んだ塾生にはアマチュア劇団を主宰している女性もいる。彼女は郷土の女性史の研究者でもある。

直接間接に具体的な事業や活動をおこす引き金をひく人。それはグループの外にいる良きアドバイザーであったり、グループのリーダーであったりするが、そういう人をキーパーソンと呼んでおこう。

エンツリー代表の吉田恭子さんはネットショップを経営している。すでに述べたようにエンツリーのメンバーはいろいろなスキルや技能を持っている。ただ吉田さんのように自分で事業を立ち上げた人はほとんどいなかった。そういう人たちといっしょに活動をおこすとき、吉田恭子さんはロールモデルにしてキーパーソンの役目を果たした人といえるだろう。

このように受講生の中にはロールモデルやキーパーソンになるような人が隠れている。学習プログラムを企画するときには、そういう人たちに受講

II 実践の展開

してもらえよう魅力的な内容にすることが重要である。

生涯学習は受講者がソーシャル・キャピタルをふやす良い機会である。生涯学習で学ぶ人の中にはソーシャル・キャピタルの乏しい人が少なくない。子育てにかかりっきりだとか専業主婦だとか、そういう女性たちも一般にソーシャル・キャピタルが乏しくなっている人たちである。

ソーシャル・キャピタルを、それが必要な人たちに向けて広く配分する。人びとは学びによってソーシャル・キャピタルを形成する。働いて貯金するのと同じように、学んで知識とソーシャル・キャピタルとを蓄積する。生涯学習はそういう機能を果たすことができるし、果たすべきである。おとなの学びにおいて知識情報を得ること以上に重要なのがソーシャル・キャピタルの形成である。

4 おわりに

久しい以前から、生涯学習は「冬の時代」といわれている。

生涯学習がもっとも盛んだったのは1960年代70年代だったろうか。地域活動の拠点のような公民館がたくさんあったし、青年団や地域婦人会の活動も盛んだった。そしてそこから多くのリーダーが生まれた。それに比べて今はどうか。今でも公民館は地域活動の拠点としてそれなりに機能しているが、公民館がはたす役割はかつてに比べるとずいぶん小さくなっている。公民館の活動はしばしばマンネリ化し停滞している。利用者も高齢化している。

いまから考えると、80年代以後の時代の変化に対して、社会教育の対応は一面のだった。たとえばほとんどの都道府県が生涯学習システムをもっている。多様な講座と講師をそろえ、何科目以上学習すれば認定書や修了書をあたえる、といったシステムになっている。学んでいる人の多くは高齢者であり、また中高年の専業主婦である。これは高齢化への対応であったが、「男は社会、女は家庭」という性別役割分業を前提とするものだった。

60年代70年代までは地域の青年団活動や婦人会活動がさかんだった。こ

ういう団体が社会教育の受け皿として活躍していた。だから知識教養型の学習であっても効果があった。ネットワークがしっかりしていたからである。しかし、いまは団体を受け皿にするような社会教育は成り立ちにくくなっている。個人のニーズに合致し、それとともに個人と個人を結びつけ、ネットワークの形成につなげる学習プログラムが求められている。

地域の社会教育施設は、子育て中の母親たちが、子育てや人生の次のステップについて学ぶのに最適の場所だと思うし、地域のNPO活動が生まれるのにふさわしい場所だと思う。子育てが一段落したら何かしたいとか、高齢者福祉の活動をおこしたいとか、定年後は市民活動をしたいとか、そんな思いの人がたくさんいる。そういう人たちに必要なのは、起業や地域活動や就業につながる学びであって、たんに知識教養を高める学びではない。ところがそういうニーズを、社会教育は十分に開拓しきれなかった。その結果、起業やNPO活動について実践的な関心を持つ人は社会教育施設で有用な知識情報を得ようとは考えないという状況になっている。

これまで社会教育は知識教養を高めるタイプの学びに力を入れてきた。各種講座のメニューをながめると、つくづくそう感じる。もちろん知識教養を高める学びも必要である。しかしもうひとつ、実践的な能力をつける課題達成型の学びも必要である。いまの社会教育はそのタイプの学びが弱いのである。課題解決のための能力を身につける。すなわちエンパワーメントである。エンパワーメントの支援と呼ぶにふさわしい学習プログラムにどういうことが重要なのか、そのことに関する研究と経験の蓄積が切実に求められている。

(ひろおか・もりほ 中央大学教授)